少年立志修養訓話
257
342

特26
916

御影師範學校長 和田豐先生序
同附屬小學校主事 竹田明一郎先生閲
廣瀬金藏著

少年立志修養訓話

明治
41 4 1
内交

大阪
神戸
寶文館發兌

教育勅語

朕惟フニ我皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト倶ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

序

廣瀨君は、我御影師範の出身にして篤志の教育家なり、頃者思ふ所あり、小學校を卒業したる兒童をして永く學校の教訓を忘れざらしめ、延いては一般少年の訓戒とも爲さんと欲し、平常說話せし要領と並に必須と認むる補充の事項とを蒐めて一小册子となし、余に其稿を示せり。一讀するに世の少年一本を座右に備へ熟讀玩味常に自ら省みば必ずや得る所あるべく、是亦一種有用の書たるを疑はざるなり。

明治四十一年三月

兵庫縣御影師範學校長

和田豊

端がき

教育勅語は我國民教育の神髄である、我國民の守るべき道はこれ以外には出ない。隨つて如何に千萬言を費しても勅語以外に我國教育の意義はない、にもかゝはらず著者が已れの淺學を顧みず、此小册子を書いた理由は、其一端でもを一層卑近に、又、實行し易い樣にと、思ふ微意から出たものである。讀者幸に此意を諒とし一讀の榮を賜ひ、或は、多少にても裨益せられる所があるならば、望外の光榮とするところである。

明治四十一年三月下浣　神戸の寓で　著者識す

ことはり

一、說話題目はなるべく順序立てた考へであるが、なほ充分とは云へぬ、此の種の說話には止むを得ぬことゝ、まづ目次の如くに配列したのである。

二、格言は國定の小學修身書のを基に取ったが、なほ常々集めたものを書き加へて、說話を括約して一種の結びとした、其出所の明かなのも一々名を書かないのは、繁をさけたのである。

三、說話の程度は高等四學年卒業を度としたが、用語中には稍、難解なのもあるそれらにはふり假名をつけたが可成は略義をも上欄に書くつもりであつた、然し其一節を讀み終はれば自然其意味を解し得るものも多いと信じた

から止めた、之れ又不充分と云はねばならん。

少年立志修養訓話目次

一　身體と精神　一
二　酒と煙草　七
三　讀書　二十
四　新聞　二十九
五　交際と智識　二十
六　注意と智識　二十二
七　立志　二十四
八　人の性分　二十六
九　勇氣　三十二
十　勇氣と忍耐　三十四
十一　勇氣と自信　三十六

十二　反省　三十七
十三　餘裕　三十九
十四　金錢　四十
十五　地位、名譽　四十四
十六　交際　四十六
十七　雅量　四十八
十八　博愛　五十一
十九　慈善　五十四
二十　國民としての心得　五十七
二十一　運命　五十九
二十二　人生觀　六十六
二十三　結び　七十一

少年立志

修養訓話

寶文館編輯所編

一　身體と精神

世の中に幸福と云ふべき事は多くあるが、其うちでも心身の健全であると云ふ事が、最も幸福である。

まことに人間が此世で望み求めるところのものは、物品、金錢、名譽又は地位などと數限りがない、是等は、皆々心身が健全であつて、はじめて用をなすもので、もし心身がなくなればどんな財産も、名譽も、地位も全く意味のないものとなるのである。

西洋の格言に「たとへ世界の富を悉く集め得ても生命を失はゞ何にかせん」と云ふ言ばがあるが、實によく云ふてある

子孫に遺傳す

身体と精神の關係

と考へる。

心身の健全と不健全とは只現在の自己一代だけでなくて子孫末代にまで遺傳すると云ふことを考へると、なほ一層心身の大切であるといふ感じを強くするのである。

私がこゝに唯身體と云はないで、心身と申したのは云ふまでもなく、身體と精神とを含めたのである、其理由は昔は身體と精神とは全くちがふものであると考へてゐた時もあつたが、今ではよし全然同一の物でないまでも非常に密接な關係を有してをるものと考へられてある、丁度物を見るに表から見るのと裏から見るのとは見る方面がちがふから一寸別々の物の樣に思はれるが其實全く同一の物を見てをるのと同じことである。「健全なる精神は健康なる身體に宿る」と云ふ格言などはよく此間の關係を云ひあらはした言ばと考へる。

身体の健康を計る方法

攝養

運動

そこで御互ひ身體の健康を計るには、先づ衞生に注意し、攝養をせねばならん、何事でもきまりよく適度にすることが大切で、衣服などもあまりうすくつて寒むすぎたり、又あまり重ねて暖かすぎたりしては共によろしくない、食物もあまりおいしい物ばかりでも決してよくないのと同樣に極くまづい物ばかりでもいけない、其分量に於ても同樣で身體相應にたべて決してたべ過ぎをしてはならん、運動も疲勞するまでやつてはいけない、折角の運動が却て身體に害をするから、何事でも極端に走らんで中庸でなければならない。

さて、世の中には、よく健康、健康と申してゐるが實は健康位では物たりないので萬一病氣にでもなつたらば直ちに全快する力即、恢復力がなくてはならない、これには健康以上

身体の鍛練

に筋肉の強壯、今一つ其上の勇健、剛勇でなければとても今の時勢に日本男子、いや日本國民として大に活動し大事業を成し遂ぐることはできん、これにはよく自己の身體の強さを考へて、身體相應に兵士の如く、或は昔の武士の樣に身體を鍛錬せなければならない、擊劍柔道もよからう弓術もよからう特に水泳はよろしい、其他よく此頃云はれる冷水浴とか、冷水摩擦とか、又深呼吸とか、鐵亞鈴とかと各土地の異り職業のちがふにつれて、それ〳〵適當な方法が必要である、體操なども、只筋肉の體操ばかりでなく、神經の體操、又は意志の體操などもやつて、「渾身是膽」と云ふ古語の樣にならねば滿足はできない。

意志

氣を養ふ方法

心にも身體と同樣に適當な食物が必要である、精神の食物と云ふのは「樂み」と、でも云はうか之にも種々あるが學校の

讀書

生徒ならば一生懸命に學校の課業を勵んだ暇には、無益に遊んで時を過すこともしないで更に教科書以外で參考となる書籍を見るとか、又は趣味に富んだ雜誌を讀むとか或は學生でない人ならば職業の餘暇に有益の雜誌とか文學趣味の書物を讀むとかする、即ち讀書は一つのよい精神の食物ともいふべきものである。

娯樂

其他繪畫を樂んで審美の情を養ふとか、或は、盆栽園藝を愛して植物を育て庭をつくりなどすることもよろしい、特に散歩をかねて昆虫の採集をするとか植物の採集をするなどは、一方には智識を養ひ自然の妙を味ふと同時に大に精神を樂ませることが出來る、學生などには最も適當してをる。人にはどうしても自分の職務とか職業以外に己の好むところに從つて何か「樂み」といふものがなくてはならない。

樂について の注意

「樂み」を持たぬ人は、やゝともすれば惡い方に入り易いものである、しかし人間の弱點として已の好むところには度を過して之れに耽り之れがため大切な本職を忘れて省みない樣になりやすいものである、そこは、常に注意して本末を誤つてはならん。

◎幸福は先づ健康に存す。

◎病は口より入る。

◎民多くして健康なるは一國の生命なり、學問技術、農、工商業成功の源なり。

二　酒と煙草

娯樂の目的

人間には樂みも、嗜好品もなければならないが、娯樂を求めたり嗜好品を用ふるのも、目的は之れによつて精神を愉快にし身體を健全にするに外ならぬのであるから、此の目的に背いた娯樂も嗜好品も共によろしくないのである、學問上からも確實に有害であると云はれて居る、酒を娯樂の王に數へ、煙草を第一の嗜好物として用ゐることは、甚だ其意を解しない次第である、少々學問の有る人々は其害を口にはするが、矢張り決心が弱い爲に其利用を誤つて身體を害し、品格をさげる樣に立ち至る者が實に多い、甚しきは酒のために一家を滅す人も少くはない日々の新聞に出る敗德の原因は多くは此邊にあるのを見ても其害の著しいことは知られるのに中々之れを止めないのみか、隨分其度をす

ごすのである之れはまだ實際其害の如何に多大であるかをよく、知らないからであらうと思はれる、如何に無頓着な者でも忽ち傳染するペストや、赤痢には近よらないのに、酒を飲み煙草を喫ふことを思ふと、どうもまだ眞から其害を知らないからであらう、私は有ふれた議論とは思ふが、なほ此意味から少々酒と煙草との害を述べてみたいと思ふのである。

酒に害の有るのは、其主成分のアルコールの爲めである、アルコールが血液中に入ると循環して腦神經、及び身體各部の神經を刺戟し興奮せしめて生理的に色々の現象を心や身體に起す、最も其量にもよることではあるが、例へ一時は快樂であっても決して有益なものでなく、必ず相應の害毒をのこすものである、之れについては、世界の醫學者が屢々

論證して居ることであるが、此所に明治三十年和蘭禁酒大會の時に博士レース氏の述べられた結論をあげると「酒精は身體の細胞中、原形質に對する明瞭な毒物で又神經殊に、末梢神經、及び卵、精虫に對する有毒物である、もし兩親が飲酒家であれば、其中毒は子孫に遺傳し、酒精中毒性變質遺傳となつて、色々の不具者や、馬鹿が、出來やすいから出來ることならばどれ程迄は無毒であるか、と云ふことを見出したいが、之れは甚だ困難である、それ故むしろ酒類の飲料を一切禁ずるがよい」といふことであつた。

次ぎの演說でチーヘン博士は、又小兒に酒精の大害であることを述べて、母親の懷胎中でも、又乳を子供にのます時期でも母親が酒を飲むことが小供には甚だ害があることゝ、もし小供の時に酒をのめば、癲癇、ヒステリー、神經衰弱半身

不隨、白痴、又は他の精神諸病を生じ、たとへ少量でも病氣となりやすい身體になるから、小兒には特に注意せねばならぬ、ことを云はれた、其他小學校の生徒で、酒を飲む者と、飲まない者とを、試驗して、皆飲まない者が良い成績を取つたことなどを研究した學者もある。兎に角、この方面から申しましても、酒はよくないから小供の時から飲まない習慣をつけるにかぎる。

煙草の害

次ぎに、煙草の害であるが、これも其成分にニコチンと云ふ劇毒があるからで、少量は精神を爽快にし、筋肉の疲勞を回復し鋭敏にする功もある、然し、多量に用ゐると神經を遲鈍にし、心臟及び、筋肉の脂肪を害して、慢性胃病の基となるから有害である、明治三十三年に政府は法律で、丁年未滿の人の喫烟を禁じ犯すものは其器具煙草を没收し、違警罪に準

禁烟に關する法律

じて之れを罰することにきめたのでも分る、煙草を喫ふことは全く習慣で我國には文錄年中に渡來したもので、それまでは全く煙草などはなくてすんだものである。

現今では、諸外國でも酒と、煙草との有害を認めて、禁酒、禁烟の會が所々に起つてをるが、之れは實に文明の恩澤と思ふ。幸にまだ酒や煙草を飲む習慣のついてゐない人々は、よろしく其害を未然に防ぎ、決して酒や煙草を用ゐないがよろしい、少量ならばよいといつても然し之を用ゐ始めると次第次第に其分量を增して遂には煙草がなくては耐へられないやうになるのが普通であり、殊に煙草を喫ふ人のわ話を聞いて見ると始めは大增苦しい、少しばかり喫ふても腦が痛んだとか頭痛がしたとかいふやうの譯であつたのが唯だ人の眞似をして喫ふてをつた中に今ではどうしても

用ゐずには居られないやうになつたといふのが非常に多いのである、後には害になるばかりであるものをそんなに苦んで何も喫ふ必要はない、之れにかへるべきよき娯樂や、嗜好品を見出して心身の健全をはかり金錢や、時間の空費を惜むべきである。

三　讀書

歐米人に比べると、一般に我國民は讀書嫌ひの習慣がある、と、日本を旅行した西洋人は日記などに書いて居る、試に瀛車瀛船に乘つて見ると、たまたま乘つてをる歐米人は大抵新聞か書籍かを手にして常に世界の智識に遲れない樣につとめて居る、所が我國民を見ると概して居眠りをするか

さもなければ爲にもならない雜談などに時を移し甚しきは、あたりかまはずに、下品な事柄を自慢らしく話して得意がつて居る、歐米人が常に世界に雄飛するのは常々此心掛が何事にも及ぶからであると考へられる、讀書は實に智識の母である、此ありがたい文明の世に生れて一字でも字の讀める人は必ず讀書せねばならない。

今は昔とはちがつて、出版術も進歩したから、昔ならば何圓とした書物でも僅かに數拾錢を出せば、之を買つて、座ながら世界の大學者、又は、名士の高論卓說を聽くことが出來る、これからの人間は唯々酒や煙草や、つまらん世間ばなしなどに時間をつぶさずに價値ある書物を讀み、世界の文明に遲れないやうに勉めねばならない。身は一室に在つても、心は世界中に歩み廻つて誠に其趣味が至る所に充ち滿ちて

盡きることのないのは讀書の効である、時は金なり。

時を惜む人は、眞に生命を貴ぶ人なり、など云ふ格言をも心掛けて、常に寸陰を惜んで讀書せねばならない。

書籍の選擇

讀書するに先立つて、書籍の選擇をせねばならないが、之れには、矢張其人と時間とによつて、專門的に或事柄をしらべる事もあれば、唯少し時間があるから、道樂に何か讀んで見ると云ふ場合もある、それであるから、決して一定は致してゐないが、各自の目的によつて、各自其目的に、はづれん樣に良い書籍を手に入れねばならん。

讀書法

さて、愈讀書するにあたつても、唯無意味に讀まないで經濟的にやらねばならん即ち讀書法の一通りを心得んと損んが多いと、申して、別に讀書法にもかぎりきまつた、方法のあるのではないが、先づ普通には文章をまなぶべき書物や、感情に訴へて讀む書物などは、音讀して、何度も何度も之を繰り返すことが大切である、又記憶せねばならん時とか教訓を主としたる格言の樣な物は、默讀してよくかみこなさなければならん、又一通りあら讀みして、後更に精讀を必要とする書物もあれば、通讀で充分なのもある、概して云へば、學校で讀む教科書などは、初から精讀の必要がある、雜誌などは、通讀でたりる場合が多からう。此他讀書法としては或は、讀書の時間であるとか、記憶の方法であるとか、種々樣々な事がある樣であるが、之れは皆各自によつて流儀があることで、兎に角目的を誤らん樣にすればよいのである。

讀書する時の注意

今注意すべき重なる點を云ふならば、先づ第一著者の言語などに拘泥しないで其意味を取ること、第二に批評的に讀んで其文の眼目とするところと、無關係又は不必要なとこ

ろとを明瞭にかみ分けること、第三にはよく其文の根據がいづこにあるか等の點である。

終りに字書のことについて一言したいのであるが、云ふまでもをく、讀書するに、常に教師がなくては讀めないといふやうではこまるから、字引を引く事を練習して、早くから獨力で讀書するくせをつけて置けば便利である、字引にも種類は多いが漢和大辭典、大槻氏の言海、金澤博士の日本辭林など二三種を選んで、常に之によつて助けをかるのが便利である、字書は可成製本出版年月などを考へて、少々高價でも、數多くいらない書籍だから、良いのを求めねばならん、隨分此頃のつまらん字書には誤りが多い、心得ねばならない。

◎玉みがゝざれば光なし、人學はざれは智なし。

◎ゴールドスミス曰く、

書籍は伴侶として最も善きものなり、予の初めて善書を讀むや、予はさながら、新たに交友を得たるの思ひありき斯くして其嘗て一讀したる書を再讀するに至りし時、余は再び舊知に會ひて其志を語りたるが如き感興を惹起したりしなり。

ルッソー曰く、

書籍の濫讀は學問を殺了す。

アトキンソン曰く、

讀書に對する重要の問題は幾何の書を讀まば可なりやといふにあらずして如何なる書籍を讀むべきか、將た如何に讀書すべきかにあり、美味に飽くもの必ずしも壯健にあらず、讀書の數少きもの、必ずしも淺からず。

ロック曰く、

(1)讀書するものは著者の言語に拘泥して、其思想を失ふことなかれ。

(2)讀書するものは著書の主目論說に適當要用なる思想と、無關係又は不必要なる思想とを明かにすること。

(3)讀書するものは論說の條理、主旨の那邊にあるかを明かにし、枝葉又は岐路にわたらざることに注意すべし

(4)讀書するものは論說の關係並に輕重を知ること。

(5)讀書するものは論說の根據の何れにあるかを明かに判斷することを要す。

リッチャード、ベクスター曰く、

人の賢と爲るは多く讀むに因らずして、僅少の書を熟讀するに因る。

ラスキン曰く、

(1)人生は最も短く且靜かなる時尠なし、されば我等は價値なき書を讀むために徒らに時を費やす事あるべからず。

(2)毎日をば吾最終の日の如く用ひざるべからず。

(3)爲すべき事最も多く、又最も多く爲さんと欲するものは最も多くの時間を得べし。

(4)時間に賢なる人は賢人なり。

四　新聞

時間が人をまたないと同時に、世界の進歩も又私等を待たん、人智は日一日と進歩して、今日不明である事も明日は明かになることもあり、今は唯不思議であると驚嘆して居る事實も數年を經ずしてたやすく說明ができる樣になるの

が今日の有様である、此世界の日々の進歩や出來事を報ずるには新聞と云ふ至極結構なものがある、是非日々一二錢を儉約して新聞を購讀せねば世界の進歩に遲れて若い小供などにも後指さゝれて笑はれる事になる、決して一日一時も滿足して居てはすぐに退歩する。誠に油斷の出來ない時節である。

五　交際と智識

智識は書籍だけでなくて、學識の高い人や、又は經驗が多くてよく世事に通じた人と交際して得られるものである。交際によつて常に活きた智識と感情とを交換する點はなかなか簡單なる書籍などの到底及ぶ所では例へば、一般に都會の人が田舍の人より智識に富んでをるのは、交際する圍圍の人が皆比較的智識に富んで居ることが、たしかに一の源因であると思はれる、例へば神戸の樣な外國人の出入の多い所は、知らず識らず外國語を聞き覺ゑるとか、又軍人に知人を持つて居る人はいつのまにか軍事上の智識を得て居るとか、醫者に交際する人は病名や藥の事も覺ゑると云ふ樣な次第である昔から、見學、聞學と並び立てゝ交際より得る智識の大なることを云ふたものである、それ故常に何等かについて己れ以上の人と交際したならば必ず得る所が多い事と信ずる。

六　注意と智識

注意は智識の母

何事を見るにつけても、するにつけても唯ぼんやりと不注意で居ては智識を得る事が少いものである、又余りあわてゝ注意を缺くことも多くある、例へば旅行をするにつけても唯ぼんやり歩いただけでは何も功がない、注意深き上にも注意をして何事でもよく觀察せねばならない、滊車滊船に乘つても注意をしないで唯京都とか、大阪とかを通つたばかりでは旅行の功力の半ば以上を失ふてしまふものである。

旅行と注意

漁夫と天候

海岸の漁夫で何も學問のないものが、晴雨計よりも、確實に天氣のことをあてるのも、田舍の老農が隨分の學者よりも土壤のことに明るいといふのも皆「注意」から來たことである、それ故道を歩くにも、山に登るにも、物事に注意深い人は人の知らない氣の付かないことを觀察することが出來る。それだけその人は他の人に比べて多くの智識を得たことになるではないか、又新聞を見るにしても注意して讀めば、文學上のことでも、理科上のことでも、經濟上のことでも可なりに學問をした人位には、劣らぬ程の智識を得らるる、滊車はワットが鐵瓶の湯氣に注意したことから起り、電信はフランクリンが雷に注意した御蔭であると知つたならば注意の功の非常に大切であることが、なほ一層明かになることと思ふ。

ワット
フランクリン

◎智識は歩一歩進む者なり跳躍するものにあらず。
◎智識は腕力よりも强し。
◎目的非なれば智識は過をきたす。
◎智識とは吾人の無識を知るものなり。

立志と職業

職業撰擇上の注意

七　立　志

人は家庭の貧富如何にか、はらず必ず一定の職業をとりて、身を立て自己の天職を果さねばならん、常に自ら勞して立身せんことを心掛けて親讓りの身代なことを當てにしてはならん、即ち自營自治の人となる心掛が必要である、ついては家庭の事情にもよらうが、早くて十四五才より、遲くも二十才頃までには一生自己の取るべき職業を定めて、此方向に進まねばならん、之れを立志とも、目的を立つるとも云ひ又職業撰擇とも云ふ。

職業撰擇の標準は、種々あることであるが、今其重なる二三をかけば、

一、自己の身體や能力を計つて、最も得手な方を選擇すること。

二、家庭の事情をも考へ我が思ふままにのみせぬこと。

三、社會の大勢に注意して適當な事に從ふこと。

四、父兄は元より先輩の意見を參考すること。

などで、注意に注意を加へて、無理なく徒らに地位、名譽等に馳せず、注意して選擇せなければならない、一度志を立てて後日種々の迷ひを起し、後悔しても及ばぬ事である、初めの目的の立てやうが善くなかつたために、一生を誤る例は世間に多いことである、くれぐれも愼重の態度で選まねばならぬ。

◎志は人生に意味を與ふ。

◎志あるものは事成る。

◎以て生を營むに足らざれば技拙きなり。

◎何人かの無くてかなはぬものとなれ。

八人の性分

前に述た職業選擇の第一に自巳の身體や能力を計れと云ふたが、人ほど自分の眞の價を見誤り易いものはない、或人は自分より他に偉い者はないと威張り、又或人は其反對に世界のどこにも自分程馬鹿なものはないと泣いて居る者もある、誠に古の聖人も云はれた如く、能く自らを知ることは最も困難で、然も之れを知らなければ、如何に其他の事情によく通じて居ても、失敗に失敗を重ねるものである、で昔から今日まで學者が人の氣質、俗に云ふ性分を多血質、神經質、膽液質、粘液質の四大部に分けて、研究して居るから今から此四つについて極大略の說明をして幾分自分の性分を知る參考にしたいと思ふ。

氣質の四種

多血質

多血質は、極氣輕で氣のさへた性分であるが、身體は柔軟顏色は赤くて、眼はきらきら光って歩きかたなども輕く、すべて事物に敏活で氣はよくきくが、考へは淺く殊に新奇を好み目も心も移りやすい、記憶もよろしく、地理、歷史や、圖畫、唱歌、習字などもよく出來るが、算術の樣な考への密なことは不得手である。

交際は中々うまいが、忍耐力に乏しく獨立心なども少い、この質の人はどんな職業に適するかと云ふと、商家の番頭や接待役などによろしく、役人などにしても長官は不適任で二三番目位な、切まはしのきく位置で仕事をさせると、中々よく出來るたちである、然し惡く行くと世間に云ふ小才子となって、輕卒な移り氣の人となりやすい、世間であの人は才子であるとか、切手であるとか云はれるのは多くは此たちの人である。

神經質の人は、常にふさぎがちで氣重く、まじめで沈みがちで一寸いぢが惡い所もある、身體は細長く、常に頭をたれて、歩きぶりも遲く堅くて、靴などをはいて、板の間などを歩くと、ことりん、ことりんと、歩くたちである、顏の色などもよろしくなく、あをすじなどが多くあらはれて、むらむらと急に怒ることなどがある、事を考へたり見たりしても、あまり數多く廣くない、かはりには、どこまでも深くたしかに分る所までやる、交際などは下手で友人も少い、音樂とか唱歌は嫌ひのたちで、算術などは得手で考へも深く、時には空想にふけつて、出來もせん事を思ふ樣な事もあるが、其よい所は、事物に精密で、手ぬけなく、忍耐强い點である、短所は、うたがひ深く、獨りでしづかな所に隱居でもして居たい樣で、人に對して遠慮深く、動もすると引込主義で、ふさぎがちに世を

送る人となる、職業とまたては一寸俗な方にむきがたく世渡りも迂闊で、厭世的であるが、よく行くと發明家とか、大學者とか、大數學家、大宗教家の樣なにらものになることもある。

膽液質は、一寸見ると、ぶこつに見へるが、其實熱血でむりでもやりとほす方で、筋肉なども引しまり、身體もごつしりして眼光はこはく人を射て、歩きぶりには力があつてなんとなく一くせある樣なふりをして居る、又怜悧で、覺ゑ强く、知識は博くない代りに深くたしかで、其特徴は、意志の强く且つ永く續くことで、獨立心、名譽心强く、教師の教授などにも不滿がちで、自ら勉强し、教師の穴をさがして、得意がつて理屈を云ふたりする、一寸には怒らんが、もし怒るとしたら中々はげしく、人を傷けざれば已れの亡ぶところまでやるので、冷酷の事をやることもある。長所は、正義を重じて、正々堂

粘液質

々たる事を云ひまた、行ふて兎に角、膽力あるたちだが、短所としては、豪慢で威張る、惡く行くと手に合はん人物になる恐れがある。職業上から云ふと、男らしく氣概があってよく押のきく人で、人を統御したり、長官などになつて事業をするに適當な性分で、とかく人の下につかへては滿足しない、上へ上へと昇ることをつとめ、大いに社會に事業をなすことが出來るたちである。

粘液質は、引立たん、張り合のぬけた、不性なたちで惡く云へば愚圖である、身體は水ぶくれのした樣な、力のなさそうで、歩きぶりなども不注意で、一寸酒にでも醉って居るかと、思はれ、目はきろきろして物事にひどく面白がらん代りには又悲むこともなく、冷淡で、熱しない、人に對して逆らって敵をつくる樣な事はい、な憎まれることも少い、故に交際は、

極平和で圓滿であるが、仕事に怠慢で、同情が乏しく、先づ自己の利害を先きにするのである、一見豪傑風で、清濁合せのむと云ふ樣な無神經、不活潑な所や、無頓着で物に熱せず、動かざる事山の如きなどは、利用の如何によって、惡くもなり善くもなる。

之れを職業上から見ると、乘り氣のせんたちである代りには、どんなに失敗しても、何とも思はず、苦しまず、あせらず、呑氣である其社交に圓滿で、熱しない所は御役人などには至極もてこいの性分で、よく人々の間を圓滑にまるめて中々俗むきの仕事にもぬきさしのきく上手取りで、氣永に沈着な所はよいが、怠惰な所が缺點である。

以上述べた、四つの氣質は、皆元より一個人が單純に其何れか一つに相當するのでなく、多くは、二つ以上の混じたもの

で、唯其主とする部分、即ちがらが多血質とか、神經質とかであると云はれるのであるから、各其持前の性分の長所は、ますます發達させて行き、短所は之れをすてゝ代ふるに他の長所を以てするならば、必ず立派な品位ある性分をつくり世に立ち人を益する事が多いにちがひない。

九　勇氣

凡そ世の中の事は、何でも云ふは易く行ふは難いことであるが、然し何事も實行せなければ何の役にもたゝん、實行するには氣勇が無ければならん。

一口に勇氣と云ふが、少し立ち入つて考へて見ると、單に身體の危險を物の數とも思はず少しばかりの事にも威勢を示さうとする樣な勇氣もあるが、それは、小勇といふものである。

昔の人の教に「義を見てなさざるは勇なきなり」といふことがある、平生は沈着であつて決して物事に腹立ち怒るやうのことなく、又人には親切で少しも荒々しいところが見にない、然し國家のために盡さねばならぬ時とか、世の中の人の爲になる場合であるとか云ふやうの時には、如何なる困難苦勞をも厭はず、危險をも顧みず己の全力を盡して己の爲すべきことに骨を折るのは大勇と云つて、皆の人が行はねばならぬことである、この心掛けは己一身の事についても、同じことで今何か事を始めるとするその先のことを、よく念入れて考へた結果、必ず成功するに違ひないと豫期して愈實行に取りかゝつたが、不幸にして種々の事情の爲め

に敗れを取った、しかし泰然自若少しもあわてず、さわがずよく既往を省み將來を慮り屈せず撓まずして、その事に力め成功しなければ止まないと云ふ如きは、眞の勇氣と云ふべきもので、大切のことである。

◎勇者は最後まで我身のことを思はず。

◎火は金を錬り、苦難は勇者を錬る。

◎勇あり誠あるものには難きことなし。

十　勇氣と忍耐

事業をするには前に述べた樣に勇氣は第一必要であるが之れと同時に又忍耐力がなければならん、世間には隨分仕事に取り掛る前とか始めは、中々勇氣が盛んで、如何にも頼母しいが、年月を重ねてくるにつれて、勇氣がつゞかないで

日本人の忍耐力

忍耐と身體の關係

隨分中途に屈して成功するものが少い、これは多くは此忍耐力即ち如何なる事情困難に出會ふとも撓まず折れぬ、堅忍不拔の氣象が少いからである。

一體日本人はどうも此忍耐力が少いので、中々諸外國人に比べると敏活ではあるが事をなしとげない、頭ばかり大きくて尻すぼりの事ばかりやる、之れと云ふのも其根本は體力の不充分によることが多いから始めに申した身體の健全がどうしても大切である。

◎世界は忍耐するものゝ所有なり。

◎勇氣と持久とは何人をもローマ人たらしむ。

◎點滴石をうがつ。

◎點滴石をうがつは力にあらず斷ゑず落つればなり。

◎忍耐は苦しされど其結果は甘し。

十一　勇氣と自信

自信力の必要

勇氣の根本をたづねると自信と云ふことに關係することが多い、自信とは、深く自らの力量能力をよく知つて之れを信ずる事で、之れが中々大切である人間には分に應じて此自信力がなければ到底世に立ち此社會の競爭に勝利を占める事は出來ん、例へば己には學問がないからとても人と同じ樣に競爭して勝利を占めることは出來ないなどと無暗に尻込みするのはよくない、自分には學問はそれ程ない、しかし今迄數年間實地にやつて來た經驗で學問のある人と同じ成蹟を上るやうに是非やりたい、いや決して出來ぬことはない、むしろその人よりも、優つてやらうと云ふやうに自己の能力を十分信用して仕事をすれば勇氣も出て來て、失敗することが少なからう、しかし唯自信と云つたからとて自分一人り偉い者になつた氣で居れと、云ふのでなくて、よく自己の能力の程度を知つて、之を信ぜよと云ふのでなく誤らない樣に注意せねばならん。

自信と自分天狗

十二　反省

反省の必要

何事でも改良進歩を計るには、是非實驗の上でなほ能く考へて見なければならない、特に人の心事は復雜なものであるから、己れは人の爲めに善事をなしたと思つて居ても、人はその割合に感じないばかりではなく、實際まゝ却つて害

をなして居る樣な事もある、彼のよく云ふ親切の却って不親切になるためしは、隨分世間に多い事である。一體人は我儘のものであるから時々自分で自分の心を引き締める時がないといけない、往々過失を仕出來すのはこの心がないからである、それだから一日の中にいつか自分の行をふりかへって見る時を必ず設け若し惡い行があつたならば十分苛責して再びその過を繰り返さないやうにせねばならぬ、何事をしたにしても其結果を省てより以上の善事をなすことを心掛けねばならん。瀧鶴臺の妻は常に赤白二個の系卷を袂に入れて善事をなしたと思ふ時には白系をまき加へ、惡事をなしたと考へた時には赤系をまき加へ、遂によき習慣をつくったと云ふ話である、又亞米利加のフランクリンは十三個條の項目をきめて必ず床につく前には一々

日々の行爲を反省したと云ふ事である、これ等はよい反省法と考へる。

十三　餘裕

餘裕とは、あまりのまだあると云ふ事で十が十まで費しきらないのを云ふので之れ又仕事をする上に甚だ必要な事で、勇氣にしても熱心にしても、常に餘裕が充分なければならんのである、いつもいつも有りきりの力を出しては何か事變の起って一層の力を要する時にやり通せない殘念にも今一足の所で成功すると云ふ刹那に餘裕の無い爲めにあたら失敗を取ったと云ふ事は世間に往々ある事で人は常に綽綽として餘裕を有せねばならん、之れには常に小出

しにして幾部分を殘して置くことを心掛けねばならん。

十四　金錢

金錢の意義

世人の多くは、金錢の大切なることを知つて居る樣である が、さらば何故に金錢は大切であるか、金錢の眞の意義はどうか、と聞くならば誤つた考への者も隨分有る事と思ふ、或人は錢を生命より貴い者に考へ又或物は錢を賤んで蛇蝎の樣に思ふ者がある、昔の武士、學者などは此方で今の人は多く前の方に傾く氣味が有ると思ふ、若し前の方を守錢奴と云ふならば後の方は盲錢奴と云ふてよからう。

金錢財産は元より人生の目的物ではなく、目的に達する方便か、又は目的に達した時に當然來るべき副産物であるであるから守錢奴は目的に達するまでの道くさに一生を費し、盲錢奴は目的に達する近道を知らぬ者と、云はなければならん、よつて人は皆金錢を貯蓄して目的に達する有力な助けとすべきであるが、之を最後の物と思つてはならない。

金錢の利用

金錢の大切なること

金錢は、今日の社會では物品交換の媒介物で、一日半日でも無ければ事をかぐので社會の事業の起るのも、多く之の助けをかる事が多い、隨つて正當な方法で、金錢を求める事は大切である。

勤勉と儉約

さて金錢を得るには勤勉して、儉約する他に道はない、世は隨分複雜な事情があるばかりでなく、又天災と云ふ事があつて、不慮の災厄にかゝる事があるから、收入と支出とを計つて一家一身の生計を立て、幾分にても餘裕あらば必ず貯蓄すべきものである、それには浪費、奢侈をさけて常に質素

貯蓄

金錢と獨立

借金についての注意

でなければならん。

尙金錢に關係して獨立と云ふ事を申したい、今日は、學問上で各個人は自由なもので他に何等の束縛をうけて居ないと云ふが、如何にも誠であるさて此立派な自由と云ふものは、よく金錢財産の爲めに失はれ、或は保たれるものである、例へば能く返却の見込が立たないのに、借金をすれば必ず後に獨立を失ふやうに至る時がある。西洋の或人が「借金は人を奴隷にするものである」と云ふたが能く考へないと誠に奴隷となつて自由獨立を失ふてしまう、しかし確實に返却することが出來るとか、又資本を借りて營業をすれば、必ず儲るとかの見込のある時は、借財も決して惡いものではない、大いに世界の富を流用すべきである。

次ぎに信用と云ふことが、又金錢と關係がある、最も信用は

金錢と信用

金錢以外の點によつて得ることが出來るものであるが、それにしても金錢上の事が信用に影響することが少くないやうに思はれる、一寸商人について見ても借財について違約せぬとか、不正の利益を求めぬ樣にするのは信用を得る一つの方法である。

其他金錢については他人は申すに及ばず、たとへ親族朋友の間にも正確に取扱ふべきもので、一時の人情にからめられて、不正確な事をするのは、やがて後日永遠の情誼を損ふものと心得ねばならん。

◎金錢先驅をなさば、道皆開くべし。

◎清貧を恥づるものは、富を誇るが如く不可なり。

◎小口の費用こそ、財囊を空くするものなり。

◎清貧は不義の富にまさる。

◎吝嗇の人の財を積むは、之を樂まん爲めならず之を有せんためなり。

◎金錢を信用することなかれ、信用ある所に金錢を置くべし。

◎貸金と友人とを兩つながら屢失ふこともあり。

◎支出は常に收入に、超過せざれ。

◎塵もつもれば山となる。

◎富みて驕らず窮して濫せず。

地位、名譽の解釋

十五　地位、名譽

地位、名譽も金錢と同じ樣に、人生の最後の目的物ではない。人が此の世に於て公衆の利益を計り便利を與へたなどと云ふ、善き行に對して當然來るべき副產物である。

應報の時は必ずしも近くない

然るに唯之を得んと望むのみで、何等の善行をなすことを考へない者は勤勉貯蓄といふことをしないで、金錢を得たいと思ふ人と同じことである、されども之れ、又決して賤むべき者ではない、寧ろ貴むべき者である、もし地位も名譽も必要がないといふ心になつた人が有ならば、時としては餘程危險な恐ろしい人になることがある、惡い行をしないのも已の名譽が大切であるからである地位に顧みるからである。

要する所は人は善行爲をするにあるので、地位名譽などは當然招かんでも來るものである、自ら之を望み求むべきものでないと心得ねばならん、しかし社會は單純のものでない、雜多の事情のあるものであるから手を翻す樣に、善行に

對して直ちに地位名譽が來るものではない、それがため時に失望する人があるかも知れぬが、大なる心得違といはねばならぬ、名譽のために名譽を求めてはならぬ。

◎名譽は、絨毛の上、天蓋の下にて得らるゝものにあらず。

◎名譽は善德の報酬なり。

◎名譽をさくれば、名譽之れに從ふ。

十六　交際

人は生れて直ちに助産婦の手をかりるのを始めとして、死して野邊に送らるゝまで一時半時も社會と共立せなければ、單獨に生活のできるものでない、即ち明け暮れ人々と接して互に助けつ助けられつせなければならぬものである、

それ故交際の圓滿と、不圓滿は尠なからず、自己の仕事、その他種々のことに影響する、よろしく、社交の一班を心得て圓滿に世を渡り愉快に仕事をなすべきである。

交際上の心得を今一々列擧するのも、數限の無い事であるが、會談によりてよく意志の疏通を計るとか、又、よく時と場合とに適應したる話の材料を見出すとか、他人の名譽に關する事はよく注意して話すとか、訪問の時刻及び其作法、即ち衣服、應接、出入、送り物等に注意するとか、いろいろの事を心掛けねばならん、なほ注意すべきは何事も相手を見て、いつもいつも同樣に箱づめの樣に、究屈にやらないことである。

要するによく常識を養ふて、適當なる交際をするにある、みだりに權者におもねる者は、反面必ず下を虐げるものであ

ることをも知って、人を害せず、自らの品をさげない間に、交際の目的を達すべきである。

◎友を失ふより大なる損失なし。

◎好き道づれあれば遠き道なし。

◎善を責むるは朋友の道なり。

◎水は方圓の器にしたがひ人は善惡の友による。

◎僞友は不俱戴天の敵よりも不可なり。

◎朋友を試みるは逆運の時にあり。

◎我身をつめって人の痛きを知れ。

十七　雅量

世間の萬事は、至って複雜のもので十中の八九までは自己の思ひ通りに行かぬものである、特に現今の樣な生存競爭の激烈な時節は、なほ更である之に打ち勝て身を立てるには、是非大いなる雅量がなければならん。

雅量の必用

雅量とは、嫉妬心と、競爭心と、偏情とを去って、能く人を容れ又物を容るゝことである、丁度大海の萬物を容れて少しも溢れぬのみか、皆之れ等を清くし、美にするが樣に、總ての人と、物と、境遇とに對して、之れを容れ更に之れ等を轉化、應用して、自己の力とするのを、云ふのである。

雅量の略義

雅量を養ふ方法

然らば如何にしたらば、雅量を養ふことが出來るか、私は先づ第一に、自己の自信力を養へと勸める、よく人の過を恕し人の侮を受けても自若として、之を色に表さんのは、自信力があって始めて出來る事と信ずる、自任、自負の心は、決して恭謙の心と矛盾せん、眞の自信力ある人で、はじめてよく恭

自信と雅量

眞善美と雅量

謙の心を養ふことが出來ると思ふ。

第二には能く眞善美を愛せよと云ふのである、心から眞理を愛するならば、たとへ他人の云ふ所、論ずる事に、寸分の眞があっても直ちに之を取ることが出來る、人の善もよく賞むる心が起き、人の美も又悦ぶことが出來る、其他汝の敵を愛せよとか、私敵に對してよく公德を忘れぬとかいふ樣な事は、當然なし得べき事と信ずるのである、雅量は實に男らしい、偉大な吾人の性格の一つで、之あると否とは、其人物の價値に甚しき差異を生ずることゝ思ふ、つとめて雅量を養ひ以て處世の一大資本とすべきである。

◎謙遜は常に優美なり、常に尊嚴なり。

◎自ら輕んじて人はじめて侮る。

◎自ら賢なりと思へる人より愚なる者なし。

愛の調和

博愛

◎汝の敵にも善をなせ、其敵を友とせんが爲めなり。

十八　博愛

以上述べた所の多くは、智識や德を養ふて力を得ることを勸めたが、人間はどうも此の世を渡るに智識と力ばかりでは、餘り沒趣味で直ちに競爭とか衝突とかが起り易くて、少しも氣がゆるせないことになる、隨って、樂みとか趣味とかいふことが缺乏して、やがて平和を害して、進歩の防害をなすことが多い、之れには、是非温い愛といふ樣な、感情を以て調和をせなければならぬ。

此愛の心を廣く推し及ぼしたのが、博愛で、畏くも勅語に「博愛衆に及ぼし」と仰せられましたのはこのことである。

博愛の意義

凡そ一切の善行、美德は、皆此博愛に基かないものはない、彼の慈善といひ、寛大、仁恕、さては、義俠などゝいふのも、皆愛の變形に外ならないのである。

さて、博愛とは、萬人萬物皆一視平等で、一切無差別であるのが其本体である、しかしこゝに注意を要する事は、古語に「其の親を愛せずして他人を愛するを悖德と謂ひ其の親を敬せずして他人を敬するを悖禮と謂ふ」といふ言ばがある、博愛にも其順序本末を誤っては却って敗德となることを戒めた言ばと思ふ。

近きより遠きに及ぼし、親しきものを先にして疎きものを後にするが、普通の人情と思ふ、であるから、人を以て物に先ずべく、父母より兄弟に至り、兄弟より親族に、親族より隣里に及ぼす如く、其親疎によって、前後緩急を計るべきはもと

りである。

なほ近來博愛の一德として動物を虐待せないやうにとの思想が、諸方に盛になって來たが誠に結構のことで古來佛教でもこの事は戒めてをらるゝのである、犬、馬、といっても同じく「自然」が此世に賜ふたもので人とかはらない、まして如何なる動物でも人間には大なる助をなすものであれば決して虐げる樣のことがあってはよくない、博愛の德の中に慈み育てねばならぬ。

◎愛は怒りよりも強し。

◎子を持たざれば愛の何たるを解するあたはず。

◎父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。

◎兄弟は兩手のごとし。

◎孝は德のもと。

◎孝は親をやすんずるより大なるはなし。
◎親しきなかにも禮儀あり。

十九　慈善

博愛と慈善

博愛の節にて慈善の根本は、やはり愛の心より出でた者であることを述べたが、此所になほ慈善について幾分の蛇足を加へたいと思ふ。

今の慈善事業

我國人も此頃、よほど慈善といふ事に注意して隨分所々に慈善家があらはれた、其大なる者は、數十萬金を投じて學校を起し又は貧民を救助して居る、やや大きな都市になると大概は貧民學校とか、孤兒院、又は、慈善病院などの設立があつて中々大した慈善事業が行れつゝある、之はいふまでもない非常なる美擧で嘆賞の外はない、ますます今後此の種の慈善家の出でんことを眞に人道の爲め社會の爲めに熱望してやまない次第である、米國などの富豪は隨分驚くべき鉅資を投じて大學を設け、圖書館を造つて公益を計ると共に、又貧民の教育又は看病のために多大の慈善事業をなしつゝあると聞いて居る、之等多くの慈善家の中には、隨分一時の名譽心にかられる者、即ち新聞に公にさるゝことを欲するための者があると云ふので、受ける方でもその人物とか、次第とかを十分問ひたゞして受けるとか、受けぬとか、を決定すると傳へられて居る、又或る慈善家になると全くの反對で多額の金圓を奇附して名も云はねば、所も云はぬ、如何に問ふても答へぬ、なぜゝ云ふ奇妙なのもあるさうである、之れは決して西洋ばかりでなく我國にもあることで人

に賞められたいために、慈善を眞似する人が少くはない、これは誠に僞善者としてむしろ卑むべきである。

一体慈善の本心は、實に美しいところの愛や、同情から出たものであるから、その中に一點の曇りがあっても面白くないのである、元より爲すは爲さざるにまさる事、萬々であるが充分慈善の眞意を解して欲しいのである。

彼の「慈善家はみだりにあたへず正しく與ふ」など云ふ言ばをよく味ふて眞の誠より出でたる慈善をする事を勸める。

◎已れより不幸なる人の爲めに多少の恩惠をなすは人たるものゝ義務なり。

二十　國民としての心得

人間は各個人であると同時に、社會の一員であり、又、國家の一員即ち、國民でなければならん、吾々は世界人類の一員であると、同時に、大日本帝國民であるから、各個人としての修德を缺くべからざると、同時に、國民としての義務を守らねばならん。

國民の守るべき事々を、詳しく言ふならば、元より限りのない事であるが、其主なる事を申すと、能く我國體を知って、之れを重じ、忠君愛國の志氣を養ひ、能く法令を守って、之れに背かず、兵役、納稅、教育、其他あらゆる義務を怠らず、自治の民としての務めを盡し、議員選擧についての心得をも守らねばならん。

愛國心の二種

以上の義務を詮じつめるならば、即ち忠君愛國と云ふことに歸すると思ふが、此愛國心を能く考へて見ると二つに分けることが出來る、一つは國土を愛すると云ふ意味と、今一つは國民即ち御互大日本帝國民を愛するの二つである、之れは元より其一方を缺くことは出來ないが、古來の歴史を見又現在の有樣を見ても、此二つがうまく行はれて居る國は日々に盛大に趣いて居るが、其何れか一方に偏すると、よろしくない、さらば現在我國の狀態は如何がであらうか、私の考ふるところでは日本人は兎角愛土心の方に偏する傾きがありはせんかと思ふ、之れは我國土の美祖先の教へに基くことではあらうが、可成は今一層人種的愛國心、即ち日本國民その者を愛する心を養ひたいと思ふ、之れは國民の智識の進歩と、諸外國との競爭より當然來るべきことゝは

我國民の愛國心

思ふが、よろしく注意すべき點である。

◎己が國の爲めに死するは美にして榮あることなり。

◎我等は我身よりも國家を重しとすべきなり。

運命の意義

二十一　運命

今日の如き學問發達の世の中で運命など云ふのは、少し迷信じみた事で、宇宙は必然の理法で支配せられ、人は又、自由意志で活動しては居るが、宇宙の宏大と、眞理の深遠なことは、到底現今の文明や、人智を以て說明しつくすことが出來ぬ、この場合に天命であるとか、或は運命であるとか云ふ言ばがつかはるゝのであらう、即ち或事柄の原因が明かでなく、如何に考へても能く說明の出來ぬ時とか、又は、或事柄の

結果が豫想外でどうも考へのつかんことが出來た場合などに通常運命と云ふ、言ばを用ひて居る樣である。

彼の有名な詩人シエクスピヤーの言ばに、

「人間は夢の材料であって其生涯は睡眠ばかりでかこまれて居る」

と、云ふたのも又古來から傳って居る言で、

「人間の一生は多きな夢を見て居る樣である」

など云ふのも、此運命の人間を支配することを述べたものである、はたして世に運命など云ふ事實が有るのか、之れについては昔より世界の有名な學者が色々と研究して、皆思ひ思ひの考へをのべて、或る人は隨分之れに反對して運命など云ふ事は更に無いもので學問の力を以てすれば如何なる事も說明の出來んことは無いと、云ふた人もあるが、ひ

るがへって現今世間に行はれて居る、實際を見ると、隨分學問が發達して色々の發明や說明を與へたけれども、まだまだ、宇宙のあらゆる現象を說明したのでなく、前に申した樣に、原因の不明な結果や、豫想以外の結果などがあって、どうしても運命と云ひたい事が數多ある、私はまづ此の範圍の事どもを、今運命といって少々之れについて考へをのべたいのである。

國定小學修身書高等科用の二に、迷信と題して、德川家康の關原出陣の際、其家臣石川某、卜占者の言を信じて「九月一日は西方塞がれり」其方位をさけて出發せられん事を進めた時に、家康笑って云ふには「西方塞がれば、我れ討ってこれを開かん、汝心を勞する勿れ」と、遂に大に大勝を得た事が擧げてある、私は此筆法で所謂運命の開拓卽ち開運策を信じて

居るものである、

彼の有名なる英雄ナポレオンの、

「不可能とは佛語にあらず」

とか、或は、

「不能の二字は愚人の字書にあり」

と云ふたのや、運命開拓策と云ふ本を書いた有名なマーデンの、

凡そ此世界にあって人間の爲し能ふ、最も大なることは自已に賦與せられた、材料で、自已に出來るだけの物を造るにある、これを成功と云ふのである。

などは、皆運命は開拓し得るもので然もそれは自已自らであることを戒めた者である。

諸君の日々勉强し働くのも、私が此本を書いて、いさゝか諸

開運の道具

卜占、祈禱の解

君に注意するのも、廣い意味に於ての開運策にすぎないのであるが、そういっては余りぼんやりして居るから、更に重ねて其要點を申すならば、運命は力と智識とによって大いに開拓し得るもので、之に情愛を加へたならば至極立派なものになると云ひたいと思ふ。

前に述べた家康の言ばはよく勝算あるを信じた彼の名將の勇氣から出た力である、ナポレオンの言も意氣の盛大な力を云ひあらはして居るので、彼がつひに一時歐洲をかき回したのも、全く此自信力があったからであらう、誠に力は運命を開拓する唯一の鑿である。諸君の能く云ふ、

精神一たび到らば何事か成らざらん。

と云ふのも、同一のことを云ふのである。

世間に行れる彼の卜占、祈禱の類も元より迷信の所は數多

あるが、要するに一大萬能力を有する神の如きものの、示したる道を信じて、疑はず萬難を排して進む力を得る爲で、之れにたまたま合う事實などがあることから、行れたもので今の世、なほ、盛に行れて居るのも、此意味に解したらば、全く分らんこともないと思ふ。

さらば智識はどうかと云ふに、之れは運命の門をしらしめ窺はしむるものである、如何に力のみあっても智識と伴はなければだめである、なぜなれば、力は限りの有る事であるからなるべく上手に少し費して、多く功果のあがる樣に使はねばならぬ卽ち經濟的に用ふるには、是非智識にまたなければならんからである、ベーコンと云ふ學者の、

「智識は力なり」

と云ふたのは此方面の力であらう。

次ぎに情愛は、共同生活と云ふことから是非なければならんので、前の力と智識とを更にうまく調和して共同生活を圓滿にする力がある、彼のクリストの、

「愛は力なり」

と云はれたのも、此方面の力であらう、以上の三つを皆よく發達させる事を修養すると云ふが、諸君はよろしく、大々的修養をつんで、運命の開拓をなすべきである。

◎余は行路を發見せん、否れば新路を造らん。

◎人は皆自家の運命を建造す。

◎逆運の利用亦怡しからずや。

◎天は兩手にて人を打たず。

◎幸運は勇者を福す。

◎余は自らつとめて、かくの如きものとなれり。

◎勉勵は成功の母なり。
◎失敗は眞理が強くなる學校なり。
◎失敗は勇者にこりては成功に至るの飛石なり。
◎勉勵は運命の神の右手にて、節儉は左手なり。

二十二　人生觀

人は幸福を得る爲めに、此の世に生れたものであらうが、いや左樣ではない、幸福と云ふのは善い行の結果にすぎない人は生活をする爲めに此の世に來たものである、生活して何になるか、どうするか、生活して働くのである、働いて何になるか、其目的は何であるか、などと云ふ問題を、學者は、名けて人生の意義とか、又人生觀とか云ふてをる之は中々むづ

かしい問題で、一寸分らんが、さて之れを困難である、からと云ふて知らずに過すと、今まで述べた事も、諸君が毎日すること、爲すこと全く、無意味の事になつてしまふから、あらまし之について御話をしたいと思ふのである。

御互ひ人間といふものは慾のかたまりであつて、まことに無數の慾をもつて居る、之等の慾望をとげるについて、世渡をすることであるが、其うちに何一つとして思ふ通りに行かぬものなく、金がほしければ金は儲かるし、御馳走がたべたければ直にたべられる、よい衣服がきたいと思へば着られると云ふ樣に、何んでもかんでもうまく行くと、世渡りは誠に面白い實に樂みなものである、彼の藤原の道長がよんだ、

此世をば我世とぞ思ふ望月の

かけたることもなしと思へば

の歌の樣であらうが、さて實際世の中は、右の樣にうまく行く所か、御金も無ければ、今日の食物も、住むべき家も、衣服もなく、不平で難儀の山を越へ、死ぬよりもつらい目に遇ふて居る人も、隨分ある、さあかうなると、誰でも此世が樂みどころか、悲みで厭になるものである、前にいつた此の世は樂みであるとするのを、樂天主義とか樂天觀とか申して、後のを厭世主義又は、厭世觀などゝいふ、實際此の世は樂みであらうか、苦痛で厭なものであらうか、答は色々あるが、眞理はどちらでもない、苦痛もあれば、又樂みもあるのである、之は前にも、いつたが、人生は幸福を得べきものであると考へて居るから、こんな誤りが出來るのである。

さてそれなれば人生はどうであるかといふと、こゝにまた

超越主義

改善主義

前の二說と異つて、人生は樂みとも思はねば、苦痛とも考へず、此等には全く無頓着で、世の中の俗事などに關係せないと云ふ、一種の人生觀があるこれを超越主義と云はうか、かりに超越主義ときめて置いて、之は健全な人生觀かといふと、之れ又誤つて居るので甚だ不健全なものである。

されば、どれが健全な人生觀であるかと云ふと、此所に改善主義とも、改善觀とも、云ふ一種があるこれは人生の種々の慾望、即ち、眞、善、美の、圓滿な發達を期する爲めに、一歩、一歩自己を發達進歩させる、それが爲めに世渡りをする內には、樂みもあれば、苦痛も伴ふもので、樂みは成功のしるしなり、苦痛は努力した證據であると見て、漸々に完全な缺點のない人間にならう、其缺けて居り、完備して居ないのを悲まず、厭はず、益善に改めて、眞、善美の圓滿な人間に達しようとする

のが、改善主義、改善觀である之こそ、健全な人生觀であつて要する所は、人生は進歩にあり、進歩するが爲めに働くにありと云ふことになる、運命の所で述べた開運策も畢竟同樣なことになる、現在學問上稱へられる、完全論とか、自己實現主義とか、生々主義、向上主義、活動主義、奮鬪主義など云ふのは、皆大同少異の議論であると信ずる。

◎小人は只飲食の爲めに生き、君子は生きん爲めに飲食す。

◎人生は眞實なり、眞面目なり。

◎笑ふ門には福來る。

◎大なる樂みは、只大なる勞力によりて得らる。

◎勤勞門を出づれば、貧苦窓より入る。

◎勤勞には苦き根あり、甘き果を果ぶ。

◎勤勞は吾人の務めなり、成敗は神のつとめなり。

◎勤勞より健康來り健康より滿足來る。

◎額に汗して汝のパンを得よ。

◎天は自ら助くるものを助く。

◎不活動は遂に濟度すべからず。

◎經驗は極めて高き授業料を徵す、されどかほど有効なる教訓はなし。

二十三　結び

以上章を追ひ節を重ねて述べた愚見は、個人としては能く身を立て家を興し、社會の一員としては、以て世のため人の爲めにつくし、國民としてはよき日本國民として其義務を

盡されたい事を勸めるに過ぎないのであるが、幸に教育勅語の御趣意の一端にも副ひ奉って居れば私の微意は達するのであります。

報德訓

二宮尊德

父母根元在二天地命令一　身体根元在二父母生育一
子孫相續在二夫婦丹精一　父母富貴在二先祖勤功一
吾身富貴在二父母積善一　子孫富貴在二自己勤勞一
身命長養在二衣食住三一　衣食住三在二田畠山林一
田畠山林在二人民勤耕一　今年衣食在二昨年產業一
來年衣食在二今年艱難一　年々歲々不レ可レ忘二報國一

明治四十一年三月二十日印刷
明治四十一年三月廿五日發行

定價金 拾五錢

著作者 廣瀨金藏

發行者 吉岡平助
神戸市元町五丁目二十二番邸

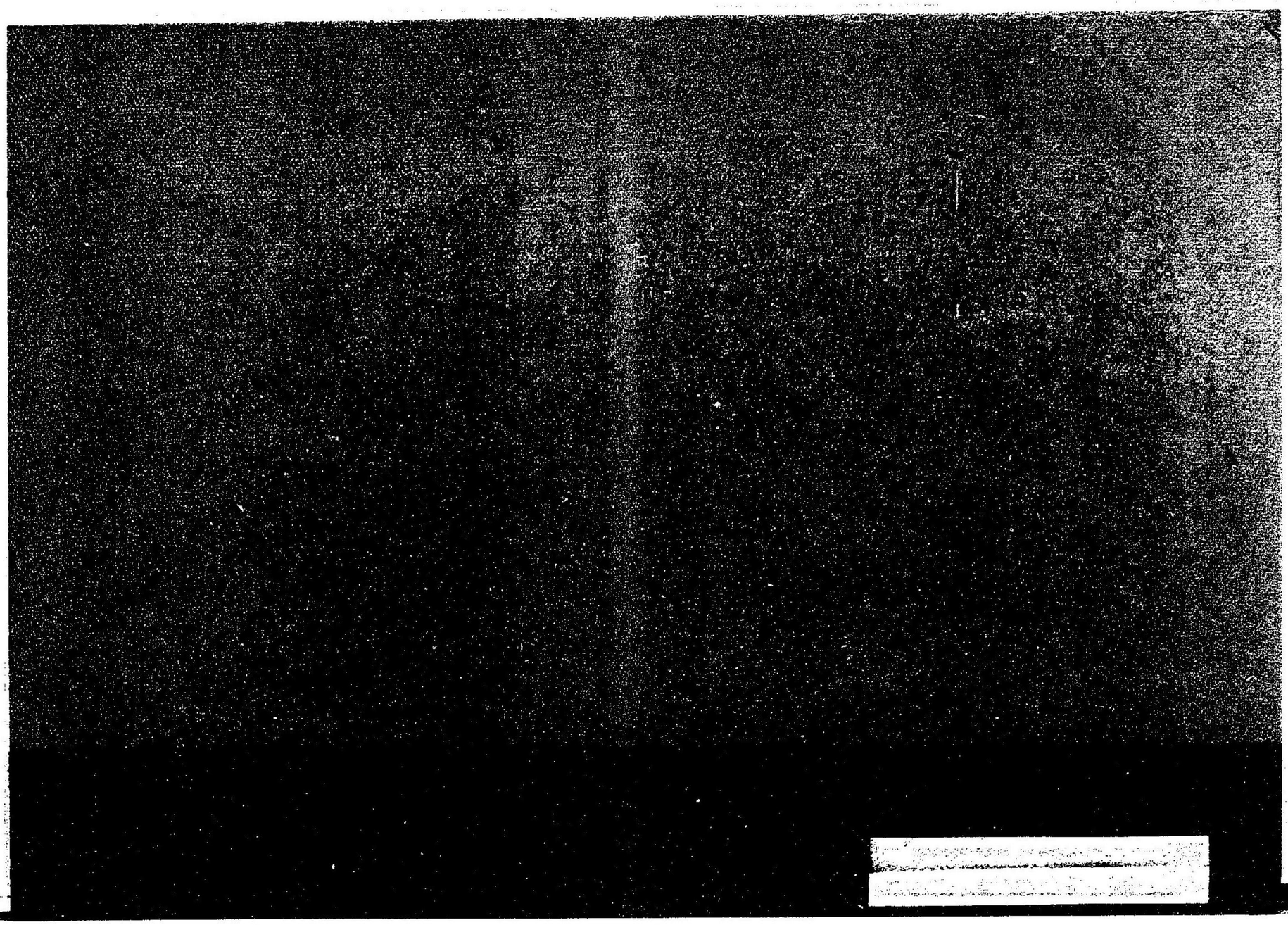
印刷者 西村圭吉
神戸市加納町五丁目百四十九番地

印刷所 寶友社印刷所
神戸市加納町五丁目百四十九番地

不許複製

發行所 神戸市元町五丁目
大阪市東區備後町四丁目 寶文館

257
342



特26
916

少年立志 修養訓話

国立国会図書館

010134-000-8

特26-916

修養訓話（少年立志）

広瀬　金蔵／著

M41

AAE-1427